

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：11301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2013

課題番号：25884005

研究課題名(和文)本邦における「全相平話」の受容に関する研究

研究課題名(英文)Research on acceptance of Five Completely Illustrated Pinghua in Japan

研究代表者

菅原 尚樹 (SUGAWARA, Naoki)

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：30712286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 300,000円、(間接経費) 90,000円

研究成果の概要(和文)：本邦の抄物『漢書抄』に収められている「高后紀」と「文帝紀」について、中国の白話作品『前漢書統集』と比較対照し、語句の削除・変更等を検討した。検討を通じて、「高后紀」と「文帝紀」は節略に過ぎない部分が見える点は否めないが、総じて文意を取れるよう配慮し、『前漢書統集』を抜き書きして成る筆録であると結論づけるに至った。また、「高后紀」と「文帝紀」には、呂后と文帝にまつわる話柄が、ある部分では断続的に、ある部分では連続して大量に、『前漢書統集』より抜き書きしてある。かかる引用は、呂后や文帝にまつわる物語的な要素を、「高后紀」と「文帝紀」に加える意図によると結論づけるに至った。

研究成果の概要(英文)："Kanjosyo" is from the Chinese vernacular works, "Qian-Hanshu". The objective of this research is to compare "Qian-Hanshu" and "Kanjosyo". Through comparison and study I clarified its objective.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：中国文学

キーワード：抄物 前漢書統集 比較文学

1. 研究開始当初の背景

本邦における中国白話作品の受容に関しては、麻生磯次氏の『江戸文学と支那文学』（三省堂、1946年）の研究などが早くから行われ、近年では、『三国志演義』の受容に関しては『三国志享受史論考』（汲古書院、2007年）が刊行され、『水滸伝』の受容に関しては中村綾氏『日本近世白話小説受容の研究』（汲古書院、2011年）が刊行されている。

しかし、本邦における中国白話作品の受容に関する研究のなかで、『全相平話』の受容に関しては、十分に研究が行われていない現状である。

本研究の対象となるのは、抄物『漢書抄』中の「帝紀」の記述である。該書を抄写したのは、道号を景徐（1440～1518）という五山の禅僧である。『漢書抄』「帝紀」の原本は、『漢書』を講義する際の手控えとなる抄出本として、景徐により明応（1492～1501）年ごろに書かれたとされる。現存する『漢書抄』「帝紀」は、この景徐抄の原本を、大永3～4（1523～24）年ごろに清原宣賢が筆写したものである。

『漢書抄』「帝紀」のなかでも、「高后紀」と「文帝紀」に『前漢書統集』の文章が引用されていることを明らかにしたのは、長尾直茂氏である。氏は「中世禅林における『新刊全相平話前漢書統集』の受容 清家文庫所蔵『漢書抄』への引用をめぐる」（『漢文学解釈與研究』第12輯、汲古書院、2011年）において、『前漢書統集』と『漢書抄』を比較対照し、『漢書抄』の両「帝紀」が『前漢書統集』の文章を抄写して成っていることを明らかにした。また論考中において、長尾氏は、両書の比較対照表によりつつ、両「帝紀」が抄写するうえで犯している錯誤を指摘している。

しかしながら、長尾氏の論考は、『漢書抄』「帝紀」成立の過程、および抄写したのは誰かという問題について紙幅が割かれている。『漢書抄』「高后紀」および「文帝紀」の記述と『前漢書統集』の叙述との比較検討は、詳細になされているとは言い難い。

申請者は、長尾氏の論考をさらに発展させ、『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」が『前漢書統集』の文章をどのように引用し、そこにどのような差異が見出せるかという点から、『前漢書統集』の受容について考察を深めたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、元の至治年間（1321～23）に刊行されたと考えられている白話作品『前漢書統集』が、日本に舶来したのち、抄物『漢書抄』の「高后紀」と「文帝紀」にどのように抄写されているか考察することが目的である。

伝存する『漢書抄』「帝紀」は、景徐が抜き書きした筆録である。景徐自身の価値判断による字句の取舍選択が介在していると考

えられる。そこに、『前漢書統集』の字句を取捨選択するにあたり、景徐がどのような意図をもって抄写したのか汲み取る余地が残されていると考えられる。

字句の取舍選択を経た「抜き書き」の形によって、『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」はどのように成っているのだろうか。その抄写態度より、16世紀当時の本邦の知識人が中国の白話作品をどのように受容したか探ることができると考えられる。両「帝紀」の記述に『前漢書統集』の叙述がどのように抄写されているのか検討することを通じて、『前漢書統集』の受容の一側面を、本邦の書籍よりうかがう。

本研究では、先行研究でじゅうぶんに検討されていない語句の削除、変更箇所を焦点を当て、語学面から、両書の差異に関して仔細に検討し考察を加え、受容者の視点から、『前漢書統集』という中国の白話作品がどのように受容されているのか、『前漢書統集』がどのように日本の書籍に引用されているのかを検討することとした。

また『漢書抄』「高后紀」および「文帝紀」と『前漢書統集』の対照部分を仔細に比較検討すると、単純な文字の異同にとどまらない、景徐による文字の変更や削除の意図を読み取ることが可能な箇所がある。本研究は、本邦知識人が中国の白話作品を受容する際に加えた改訂や犯した錯誤を明らかにすることを通じて、本邦知識人が中国の白話作品をどう理解して受容しているのか、その一側面を浮かび上がらせることも目的とした。

3. 研究の方法

『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」が『前漢書統集』の文章を引用している部分に見える、語句の削除、変更、増補等を検討する。『漢書抄』「帝紀」が『前漢書統集』を抄写する際に犯している錯誤箇所についても検討を加える。方法は次の通りである。

(1) 『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」を『前漢書統集』の影印本と比較対照し、文字の削除箇所を調べる。

語句の削除に関して、両「帝紀」が抜き書きより成っている点からすると、考察するのが容易でない箇所もある。その一方で、前文を見れば意味内容を容易に判断できる削除箇所もある。削除箇所の前後を手がかりとして、削除箇所をひとつずつ取り上げていき、削除の意図を考察していく。

(2) 語句の異同に関して、『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」の変更が妥当か否か、各種辞書の記載を基に検討する。

(3) 『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」の記述と同内容の記載が『漢書』にある場合、両書を比較検討する。『漢書』の記載が『史記』にある場合は、『史記』とその

抄物『史記抄』の記述も検討対象とする。本研究で扱う『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」の文章は、『前漢書統集』の文章を抄写して成っているが、ある部分においては、『前漢書統集』の当該文よりも、正史『漢書』の記載に近い部分がある可能性が想定される。そこで、『漢書』中に『漢書抄』両「帝紀」の記述と『前漢書統集』の叙述と同内容の記載が見える場合は、当該箇所も比較対象として取り上げる。

また正史『史記』に『漢書』と同内容の記載が『史記』の記載に見える場合、『史記』の記載が『史記抄』に見える場合は、両書も比較対象として取り上げ、『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」において錯誤が生じた背景を多角的に探ることとする。

4. 研究成果

『漢書抄』「帝紀」に『前漢書統集』がどのように引用されているか、引用部分における語句の削除、変更、増補箇所に考察を加え、錯誤箇所についても検討した。さらに『前漢書統集』の文章の引用態度を明らかにし、景徐がどのような意図から当該部分を引用したのか考察した。成果は次のようにまとめることができる。

(1) 削除箇所

省略が過ぎる箇所があり、『前漢書統集』の一文を削除したうえ、標点の打ち誤っているために、文意が不明な箇所もある。そうであるとはいっても、削除箇所のほとんどは、文意を取るうえで支障がないよう語句が削除してあることが明らかとなった。

(2) 変更箇所

『前漢書統集』中の誤字を改訂している箇所が見られた。使役を表す語「叫」をより用法の古い「教」に変更している箇所もあった。いずれも妥当な変更となっている。比較的語句の変更がなされている箇所であっても、その変更は原文を著しく逸脱しない程度に収まっていることが明らかとなった。

その一方で、書き換えに疑問を覚える語があった。とりわけ補語の書き換えは、理解の低さを疑わせる改悪となっていることを明らかにした。

(3) 増補箇所

蛇足ととれる語句の増補箇所が数カ所認められたものの、それらは内容の理解を妨げていない。総じて文意を取るうえで支障がないように語が増やしてあることが明らかとなった。

(4) 錯誤箇所

『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」は『前

漢書統集』における人名の誤記を踏襲していることが明らかとなった。引用する部分の内容に深く関わらないと判断したか、あるいは原文尊重のあらわれと推察した。人名同様に、『前漢書統集』に見える数字の誤記箇所についても、『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」は訂正せず原文通りに記している。

両「帝紀」に独自に見える誤記箇所に関しては、字形の相似による誤記と推定される箇所がある。その一方で、明らかに字形が異なっているにもかかわらず、当該語を記している箇所もあることが明らかとなった。本研究ではそれを誤記として扱ったが、あるいは筆勢による文字の異同であり、抄写した景徐ないし筆写した清原宣賢は、当該語を誤字と見なしていない可能性が想定される。

なお『前漢書統集』の誤りを踏襲しているのは、『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」だけではない。『前漢書統集』の文章を取り込んで成る、明代の歴史小説『全漢志伝』と『中興伝誌』のなかにも、『漢書抄』同様に人名を誤記している箇所がある。

『全漢志伝』は万暦16(1588)年の刊記を持ち、『両漢開國中興伝誌』は万暦乙卯(33年、1605年)の刊記を持つ。景徐が『漢書抄』を抄写した明応(1492~1501)年間、清原宣賢が筆写したとされる大永3~4(1523~24)から後に刊行された作品である。人名表記の異同に関して、『全漢志伝』と『両漢開國中興伝誌』の該当箇所を加え改めて考察を加えることにより、引用に対する彼我の意識の一端をうかがった。

『全漢志伝』は『漢書抄』「高后紀」および「文帝紀」と同様に、『前漢書統集』の誤記を踏襲する傾向にある。一方、『両漢開國中興伝誌』は誤記を改める傾向にあることが明らかとなった。かかる表記に鑑みると、本邦の『漢書抄』のみならず、明代の歴史小説『全漢志伝』も、内容理解に支障がないと判断されたに関しては、誤記を踏襲していると推察した。

以上について、『漢書抄』「高后紀」および「文帝紀」が『前漢書統集』の文を抄写した部分を見ると、原文通りの記述をしている部分がある一方、抜き書きするにあたり、削除・変更・増補を施している箇所もある。当該箇所のなかには、その意図が不明であり、意味を取るうえで困難が生じている箇所がある。そうであるとはいっても、当該箇所の大半は内容理解の障碍となっていない。節略に過ぎる部分が見える点は否定できないが、『漢書抄』「帝紀」は総じて文意を汲み取るよう配慮し、『前漢書統集』を抜き書きして成る筆録であると結論づけるに至った。

景徐は『漢書抄』「高后紀」および「文帝

紀」を書き付けるにあたり、経史子集に分類される漢籍の語句を、長短交えて引用している。

そのなかにあつて、本研究の対象である『漢書抄』『高后紀』および『文帝紀』は、末尾に『前漢書続集』の文章を大量に引用している。

両「帝紀」の引用部分の大半が『前漢書続集』からの節略になっているなかにあつて、呂后あるいは呂氏の動向、および文帝の出自に関する記述は、比較的まとまった形で『前漢書続集』の文章が引用してある。

当該部分の内容を仔細に検討すると、そこには呂后の嗜虐性が表され、また以後の物語展開を占う重要な場面であつた。呂后が戚夫人に陵辱を加えている箇所では、『史記』や『漢書』において、呂后が戚夫人を「人彘」と貶める記載とは異なる描写が見られる。そのほか、呂后が宮女と妊婦をそれぞれ生き埋めにする場面、絶食を強いた劉友のなれの果てを見て笑う場面に、『前漢書続集』の文章が断続的ながらも比較的まとまった形で引用してあつた。

文帝に関する引用部分には、次の話柄が認められた。文帝は人ならぬ姿で出生したため、父である恵帝は放逐を命じる。成長した文帝は帝王然とした容貌を備えており、ついには父の帝位を襲うことになる。貴種流離譚の典型といえるその記述は、『史記』『漢書』に一致する記載を見出すことはできない。

かかる引用は、景徐が『漢書』の講義をする際に、『漢書』の記載とは異なる呂后および文帝にまつわる物語を講じ、歴史書の講義に物語的な要素を加える意図から、「太后紀」および「文帝紀」の最後に、『前漢書続集』の文章を大量に書き付けたのではないかと結論づけるに至つた。

研究内容が大部となり、数篇に分けて学術誌に投稿する必要が生じた。投稿にあたり、各篇の関係を密接にするのに時間を要し、研究期間終了までに成果の公刊に至らなかつた。目下公刊に向け、論文を準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原 尚樹 (SUGAWARA, Naoki)

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号: 30712286

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: